日本文学科

平安朝の貴族社会へタイムスリップ。日本文学のルーツから人間とは何かを学ぶ。

ゼミ紹介 1　浜口俊裕ゼミ「枕草子・紫式部日記研究」

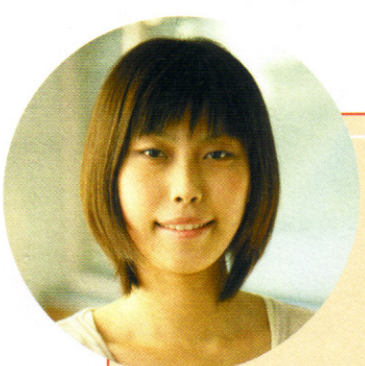
ゼミ夏合宿（京都にて）

現代の日本文学のほとんどは、平安時代にルーツを持つと言っても過言ではありません。平安時代には「仮名」文字とともに、多くの和歌や随筆・物語文学が生み出されたわけですが、今日の短歌やエッセー、小説の多くはその伝統のうえに成り立っているからです。ゼミでは平安朝貴族の社会を擬似体験するため絵画、古筆、絵巻などの実物に接したり、夏には京都合宿を通して、作品の舞台となった街を肌で感じる機会を設けています。

また、古典をよりわかりやすく、より深く理解するためにITやマルチメディア教材を活用することも特長です。授業中は全員がパソコンを使い、発表内容に疑問が生じた場合はすぐにインターネットで調べたり、古典文学のデータベースにアクセスして用例を確認するなど、立体的な授業を展開しています。こうして数々の作品は遠い過去のものではなく、身近な手触りをもつ存在になっていきます。

当時の文学作品を素材に人々が何を見つめ、考え、どう行動したのかを分析して理解することは、人間とは何かを考える手がかりになるでしょう。そして、さらに一歩進んで、作品を通して見つけた自分の意見を論理的に表現する力を磨いてください。自分の考えを説得力あるかたちで表すことは社会人に欠かせない能力です。ぜひこのゼミを活用して将来につながる成長を果たしてほしいですね。

ゼミ紹介 2　浜口俊裕ゼミ「枕草子・紫式部日記研究」



山田尚実さん

日本文学科４年
東京・都立田園調布高校出身

『枕草子』の世界を、多角的にとらえる。

私の所属する浜口先生のゼミでは、『枕草子』のいくつかの章段を研究テーマにして取り組んでいます。発表者は章段の語釈と独自の考察（清少納言にとっての中宮定子の存在、作品中の季節感や植物など）を展開させていきますが、一方的に意見を述べて終わらせず、ゼミ生みんなで考察を深めていきます。ゼミを通じて、作品を多角的に考察して論を成立させることや、研究を最後まで妥協させないことの大切さを学びました。

先生はこんな人

浜口先生はダジャレ好きなユーモアのある先生ですが、発表には厳しく、学生には「もっと鋭い考察を」と求めます。それで、一つの発表が何週にもわたることも。それだけ熱心に指導してくださいます。